



安心のネットワーク

NOSAI

病害虫防除指導報

第374号

令和6年7月29日

発行

秋田県農業共済組合
北秋田山本支所

☎0185-54-5540

7月16日現在の生育状況（県農業振興普及課調査）は、北秋田地域は草丈が長く、茎数と葉数は多く、葉色は濃い。山本地域では草丈が長く、茎数は少なく、葉数は多く、葉色は平年並みとなっております。茎数が不足している圃場は、穂数が少なくなる見込みですので適切な水管理と追肥を行い、光合成活性の維持と根の活力維持に努め、一穂の充実を図りましょう。

穂いもちの防除対策

< 発生状況に合わせた適切な防除の実施 >

県内の葉いもちの全般発生開始期はやや早く、発生量は平年並と予想されています。生育の遅れている圃場では今後葉色が濃くなり、いもち病への抵抗力が低下する恐れがありますので、圃場を巡回して発病していないか確認し、早期発見に努めてください。また、出穂期を迎えるにあたり、上位葉への葉いもちの進展は穂いもちへの移行が懸念されます。今後の穂いもちへの対応方法はこれまで実施したいもち病防除と現在の葉いもちの発生状況によって異なりますので、各圃場が次頁の（1）～（3）のどれに当てはまるかを判断し、状況に応じた対応方法を決定してください。無人ヘリでの薬剤散布が大半を占めていますが、状況によっては個人での追加防除の必要もありますので、実施する際は適切な防除を心がけてください。

穂いもち



(1) 葉いもちの発生がない圃場

これまで、いもち防除を適切に実施し、葉いもちの発生がない場合は、穂いもち防除を省略しても構いませんが、隣接圃場に葉いもちが多発している場合は、出穂期～7日後にトライフロアブル又はラブサイド剤の茎葉散布を行い、穂いもちを予防しましょう。

○茎葉散布剤

薬剤名	使用時期	10a 当たり使用量又は希釈倍数
トライフロアブル	出穂期～7日後	粉剤DL：4kg フロアブル：1,000倍(150L)
ラブサイド剤		

(2) 葉いもちの発生が認められる圃場

○水面施用剤

薬剤名	使用時期	10a 当たり使用量
コラトップ1キロ粒剤12	出穂15～7日前	1～1.5kg
コラトップ豆つぶ		250g
コラトップ粒剤5 ゴウケツ粒剤 サンブラス粒剤		4kg

※湛水状態で田面に均一に散布し散布後4～5日間は水を入れしないでください。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は落水、かけ流しをしないでください。

○茎葉散布剤

薬剤名	使用時期	10a 当たり使用量又は希釈倍数
トライフロアブル	出穂直前と穂揃期の2回	粉剤DL：3～4kg ゾル・フロアブル：1,000倍(150L)
ビーム剤		
ラブサイド剤		

(3) 発病苗の持ち込みにより葉いもちが多発している圃場

前述と同様の防除を行っても、病勢が衰えない場合は、傾穂期にもラブサイド剤による追加防除を行いましょう。トライフロアブルの本田での総使用回数は2回、ラブサイド剤とビーム剤の本田での総使用回数はそれぞれ3回以内であるため注意して使用しまししょう。

斑点米カメムシ類の防除対策

<雑草管理を徹底しましょう>

病害虫防除所の予察灯における6月1半旬～7月2半旬までの誘殺数は、アカシカスミカメが多く、540頭(平年167.8頭)、アカヒゲホソミドリカスミカメは平年並みで676頭(平年580.6頭)であり、今後の発生量も多いと予想されます。

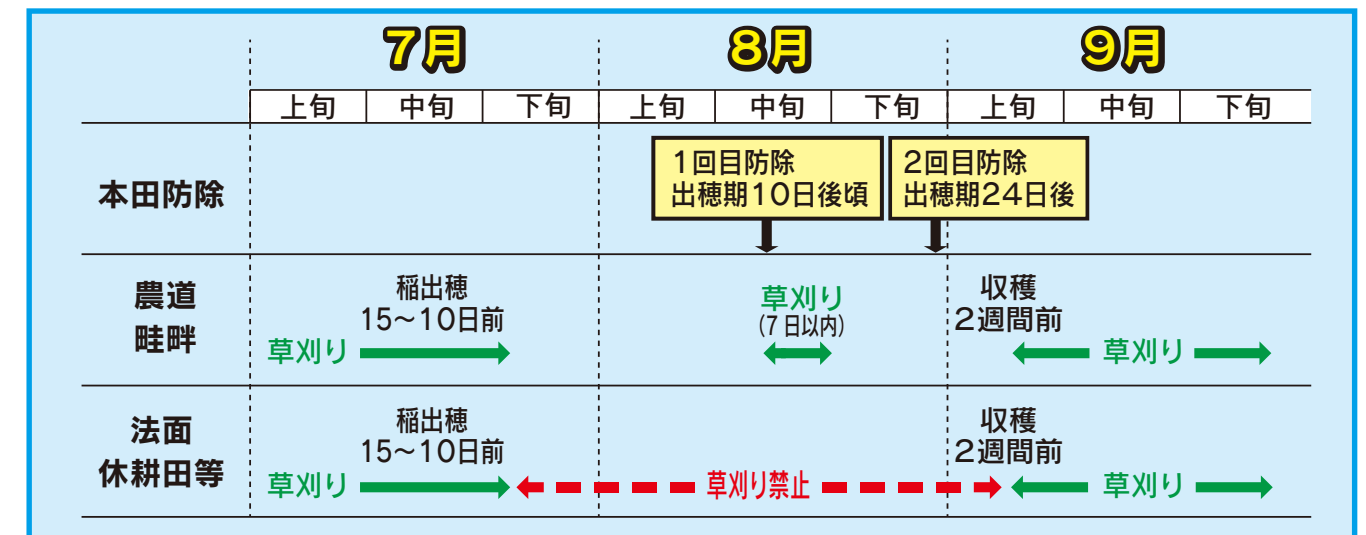
イネ科雑草が見られる畦畔では、畦畔や農道の草刈りを徹底し、発生源を断つ必要があります。また、水田内にノビエやホタルイ等多発するとアカシカスミカメの水田への侵入を助長するため、適切な中・後期除草剤を使用して雑草対策を徹底しまししょう。



アカシカスミカメ



アカヒゲホソミドリカスミカメ



【薬剤による防除法】

斑点米カメムシ類の発生源となるイネ科植物が主体の牧草地や休耕田等に隣接した圃場、発生予察情報で多発が予想される場合は、出穂期10日後頃と同24日後頃に茎葉散布で2回防除を必ず実施しまししょう。また、薬剤抵抗性の発達を防止するため、1回目に使用した薬剤の連用を避け、2回目はエクシード剤又はキラップ剤を使用してください。

1回目：出穂期10日後頃

薬剤名	10a 当たり使用量 又は希釈倍数
アルバリン粉剤DL スタークル粉剤DL	3kg
スタークル液剤10 スタークルメイト液剤10	1,000倍(150L)

2回目：出穂期24日後頃

薬剤名	10a 当たり使用量 又は希釈倍数
エクシード粉剤DL キラップ粉剤DL	3kg
エクシードフロアブル キラップフロアブル	2,000倍(150L)

大豆の病害虫防除

＜食葉性鱗翅目幼虫は多めの発生予想＞

(1) マメシクイガ

本県で被害の多い子実害虫であり、ふ化幼虫が莢内に食入し「クチカケ豆」を作ります。連作で被害が多くなり、水田転換畑では作付け2～3年以降に被害が増大するため、連作圃場では特に注意が必要な害虫です。アディオン乳剤やアグロスリン乳剤、パーマチオン水和剤を8月下旬～9月上旬に散布しましょう。



(2) カメムシ類



子実を吸汁加害し、莢及び子実への被害は落莢、不稔粒、板莢や歪曲、変色粒など加害時期によって異なります。初夏～盛夏が高温多照の年に発生が多くなりますので、マメシクイガにも有効であるアグロスリン乳剤、パーマチオン水和剤などを活用して防除を行いましょう。

(3) フタスジヒメハムシ

結実後の8月下旬～9月下旬に成虫が莢をなめるように食害し、食害された莢の直下の子実表面が黒変するため、品質が低下します。

アグロスリン乳剤、トレボン乳剤で8～9月(着莢期～子実肥大期)に防除を行ってください。



(4) ウコンノメイガ



成虫は長距離移動による飛来侵入が主体で生育の旺盛な圃場に好んで産卵する傾向があります。卵は葉脈に沿って産み付けます。幼虫は葉縁を巻き込んで食害し、一枚の葉では成長することができず、別の葉に移動し数枚の葉を綴り合わせて食害します。防除の目安としては、7月6半旬に圃場全体で40～60茎の葉巻数を調査し、茎当たり葉巻数が1.3個以上である場合は、8月上旬までに防除を行ってください。